

## 4 クラス会議の実際

一言で「クラス会議」といつても、決まった形があるわけではありません。実践者によって様々なスタイルがあつていいと思います。ここでは、私のやり方を紹介します。週に一回程度、決まった時間を設定します。主に学級活動の時間を利用します。

### 一回目のクラス会議——クラス会議を投げかけ、基本の形を提示する

「みなさんはこれまで、クラスで困ったことが起こったとき、どうしていましたか。クラスで楽しいことを計画したとき、どうしていましたか」

これまでの経験を思い出させます。

「私はみなさんに、クラスのことばクラスみんなで話し合つて決める、また、誰かが困っていたらみんなで援助し解決する、そんなクラスになってほしいと思つています。週に一時間、困ったことやみんなで解決したいことを話し合つたり、楽しいことを計画したりする時間を行つていこうと思いま

すが、みなさんは賛成してくれますか」

「これまでこう投げかけて反対した子どもはいませんでした。」

「その時間を『クラス会議』と普通は呼びますが、私たちのクラスは〇〇クラスなので、〇〇会と呼びたいと思います。よろしいですか」

私の学級には、学級目標とリンクしたクラスネームがありました。例えば、「何でも言い合えるクラス」という学級目標のときは、水中でコミュニケーションをとっていることから、「くじら組」と名乗っていましたので、クラス会議名は「くじら会」と言っていました。こんなふうに名前をつける、子どもがクラス会議に愛着を持つのでおすすめです。

### 基本の形① 輪になる

「クラス会議は、特別な時間なので、みなさんの並び方も普段の授業とは違ったものにしたと思います。机を廊下に出して、椅子だけで輪になります。これを素早く、静かに、お互いに思いやりを持ってやるためにはどうしたらいいでしょうか」

「出入り口に近い人から机を出す」「おしゃべりをしない」「机を引きずらない」などのことを言うでしょう。

「それでは、この意見を参考にして輪をつくってみましょう」

たくさん出た場合は、「この中で、特にこれをやるとうまくいきそうだというものを選んでください」と言って、支持の多い二つから三つを選びます。そして、やってみます。



椅子が並んだら、素早く静かに、お互いに思いやりを持ってやれたか感想を聞きます。

「うまくいった」という感想が多い場合は、「みんなで協力して輪になることができ嬉しそうです」と、みんなで見解を出して協力して活動したことを喜びます。

「うまくいかなかった」という感想が多い場合は、「もつとうまくやるにはどうしたらいいでしょうか」と改善策を集めます。教室復元後、もう一度挑戦させます。

ストップウォッチを持って時間を計ると結果がわかりやすいです。ただ、単に速さを評価せずに、「静かに」「思いやりを持って」の部分もしっかり評価させます。

これは、これから自分たちの決めたことを自分たちで実践するという最初の一步になりますから、ここでしっかり成功させ、それを共に喜ぶことが大切です。今まで、先生の敷いたレールの上を歩んできた子どもが、ここから自分たちのレールの上も、歩み始めるのです。

### 基本の形② 「いい気分・感謝・ほめ言葉」の発表

「クラス会議は、進んで話し合ったり、協力し合ったりする時間です。そんな雰囲気をつくるために最初にすることがあります。それは、『いい気分・感謝・ほめことば』を発表

し合うことです。それは、まず、誰かになにか言われたり、してもらったり、自分でうまくできるよ  
うになったりしていい気分になったときのこと、例えば『昼休みに遊ぶ人がいないときに、○○さん  
が鬼ごっこに誘ってくれて嬉しかったです』というようにです。それから、誰かに感謝したいこと、  
例えば『この前の算数のプリントがわからなかったとき、△△くんが教えてくれて、ありがたかった  
です』というようにです。そして、ほめたいこと。これは、人のことでも自分のことでもいいです。  
例えば『□□さんは、逆上がりができるようになってすばらしいと思います』というようにです」  
最初ですから、これくらいいいねいに例示します。その際、次のような約束を加えます。

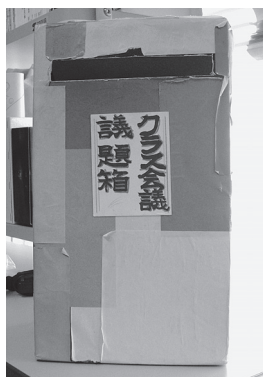
- ・ 順番に発言する。
- ・ どうしても言えないときは、パスしてもよいことを伝える。
- ・ 一度パスした子どもには、もう一度話すチャンスを用意する。

・ それでも発言できないときは「次回は言えるといいね、きつとで  
きるよ」と励ます。

全員の発表が終わったら、感想を分かち合う。

### 基本の形③ 議題を集める

「次回から、みんなから出してもらった議題について話し合いま  
す。なにか困っていてみんなに相談したいことや、お楽しみ会の計  
画などみんなで決めたいことがあったら、議題提案用紙に『話し合



**ぎだいていあん用紙**

月 日 ( 曜日 )

**名前**

話し合いたいこと

ぎだいを出した理由 (なぜ、話し合いたいと思ったのですか)

「話し合いたいこと」と『提案の理由』を書いて、ポスト(議題箱)に入れてください。一つ約束があります。用紙に誰かのことを書く場合は、『○さん』とかにして、本名は書かないでください。クラス会議は誰かを責めるための話し合いではありませんから」

このように議題を集める際のルールを伝えま

す。

最後に、「今日は、みんながクラス会議に向けて協力してくれたのでとても嬉しかったです。ありがとう」と第一回のクラス会議を締めくくります。

「輪になること」「いい気分・感謝・ほめことば」は、毎回行います。三〇人未満の学級では、そんなに時間がかかりませんが、四〇人近い学級では、最初はかなり時間がかかります。それでも繰り返ししているうちに、七分弱でできるようになります。

## 二回目のクラス会議——問題を解決する

### ① 議題の提案と話し合いの必要性の確認

議題箱から「困っていること」や「みんなで話し合いたいこと」が提案されます。議題を読み上げたあと、それについて話し合うかどうか議題の提案者に意思を確認します。

「提案者の○○さん、この議題は解決しましたか？」とか「話し合いますか？」と聞きます。議題が取り上げられるだけで十分であったり、ここまで解決している場合があるからです。

話し合う必要がないときは、次の議題を読み上げます。提案者が「話し合う」と意思表示した場合は、次に進みます。

### ② 解決策の提案

「今日の議題は、○○です。この問題について解決策を考えてください」

数分後、全員が輪番で、ブレインストーミング形式で解決策を提案します。出された解決策は、黒板にすべて書き出します。

### ③ 解決策の検討

出された解決策について、質問や賛成・反対意見を述べ合います。クラス会議のような受容的な雰

困気を重視する場では、子どもの中には反対意見を述べてはいけないと思ってしまう者もいます。しかし、反対意見は「よりよい考えを生むためには大切なものである」ことを教えていく必要があるのです。次のように位置づけて指導します。

「賛成意見は、その意見のよいところ」

「反対意見は、その意見の心配なところ」

反対意見は、その意見の「ダメなところではない」、また、反対意見が出るのは、「その意見に対して、真剣に考えている人がいるから」だと常々訴えていくことが大事です。

解決策にとって大事なことは、実現可能性です。いくら有効そうでも、実行できないものは解決策になりません。だから、子どもの議論が停滞してきたら、「それをしたらどうなりますか？」と助言し、その解決策を実行した場合起こることを予想させます。それを実行したら、解決の可能性があるのか、どんな気持ちになるのかを考えさせます。また、それが、誰かを責めることになっていないか考えさせたりもします。最初は助言が必要な場合がありますが、経験を積むうちにそういう思考をするようになってきます。

#### ④ 解決策の選択

「お楽しみ会をしたい」「学級のルールをつくる」などの学級全員にかかわる議題では、多数決をします。しかし、「誰かに悪口を言われて困っている」のような個人的な議題に関しては、検討後の解決策の中から、やってみたい解決策を選択させるようにします。

クラス会議の議題は、全員にかかわることから個人的な問題まで様々なことがあります。だから、必ずしも集団決定をするわけではありません。しかし、個人の課題に対しても全員が問題解決にかかわり、決定を見守ります。個人的な問題でも、みんなで真剣に話し合ってくれたという事実が、困っている子どもを勇気づけます。

### ⑤ 解決策の実行

困りごとに対する解決策や学級のルールは、すべて次のクラス会議まで（一週間程度）試されま  
す。その結果を、次回の「前回の解決策のふり返し」で評価します。うまくいってもうまくいって  
なくても、ルールの効力が発揮されるのは次の会議までです。

しかしおもしろいもので、うまくいっていればその解決策（ルール）は継続されます。子どもがそ  
れはよいと自覚すれば、ルールにしなくてもそれを実行し続けるのです。それに、解決すればその解  
決策そのものがなくなります。うまくいっていなければ、「もう一週間試す」や「新しい解決策  
を決める」などの手続きがとられます。

実は、この「失敗する経験」がとても大事です。「うまくいかなかったら、次の解決策を考える」  
そして「試す」。この経験が子どもを鍛えるのです。



### 三回目以降のクラス会議——問題解決を日常化する

#### ① 手順の定着

三回目からは、次のような手順で進められます。

- a 「いい気分・感謝・ほめことば」の発表
- b 前回の解決策のふり返り
- c 議題の提案
- d 解決策の提案
- e 解決策の検討
- f 解決策の決定

子どもが慣れてくれば、一回で複数の議題を解決することも可能です。しかし、私の経験では話し合うことや解決することが楽しくなるので、解決策が多く出て、一回に一つの問題解決となることが圧倒的に多かったです。

#### ② 「クラス会議」への教師の介入

今まで指示をたくさんしてきた教師としては、慣れないうちは口を出したくて仕方がなくなります。しかし、口を出してしまうと、せっかく育ち始めた主体性の芽を摘み取ってしまうことになります。

そして、一番してはいけないことは、決定事項を教師が勝手に変えることです。それをしてしまうと「なんのために話し合ったの?」「意味ないじゃん」と、クラス会議自体の価値が否定されてしまうからです。

しかしそれでも、明らかに話し合いの方向性がおかしいときや、道徳的に誤った方向に会議が進んでいるときは、話し合いの途中で教師が出るべきです。「私はそれには賛成できません」と。

また、子どもが「司会をしたい」「黒板に書く役にになりたい」と言ってきたら、立候補を募って任せます。子どもが仕切り始めると、みんなの意欲は格段に上がります。

#### クラス会議が動き出す——私の実践から

以上の手順を読まれると、高学年から中学生向きかなと思われるかもしれませんが、何年生でもできます。小学校の低学年であれば、あまり型にとらわれず、教師を中心にゆったりとやればよいと思います。

#### ① 二年生の場合——ジュンペイクんの忘れ物

ジュンペイクくんが「最近、忘れ物が多くなって困っている」と悩んでいることを議題として挙げました。私が、「ジュンペイクくんの悩みを解決するためにはどうしたらいいでしょうか」と聞くと、みんな考え始めました。

やがて、次のような意見が出ました。

「夜、持ち物を確かめて、朝、もう一度確かめればいい」

しばらく似たような意見が出ました。すると、ジュンペイくんが、「でもね、鍵盤ハーモニカのよ  
うなカバンに入らない物を忘れるんだ」と言いました。

すると、「ランドセルのそばに置いとけばいいんだよ」「カバンと持ち物を机の上に置いておけば忘  
れないでしょう」などと意見が出てきました。すると彼は、「でもね、ぼくの机の上は汚くて物が置け  
ないんだよ」と言うではありませんか。私はそれを聞いていて、ズルツと椅子から落ちそうになりま  
したが、みんな熱心にうなずいていたので、慌てて姿勢を直しました。

すかさず、「玄関にランドセルとセットで置けばいいんだよ」と続けました。さらに「いや、布団  
のそばがいいんじゃない」と誰かが言うのと、教室に笑いが起こりました。ジュンペイくんも「そり  
や、やりすぎだよ」と一緒に笑いながら、それでも真剣に考えていました。

意見が出尽くしたのでジュンペイくんに「ねえ、ジュンペイくん、この解決策の中でやれそうなこ  
とがある？」と聞くと、「うん」と言っている解決策を指しました。

次の週のクラス会議で聞きました。「ジュンペイくん、忘れ物どうなりました？」すると、彼は笑  
顔で「みなさん、ぼく、忘れ物が減ったよ。ありがとう」と言いました。それを聞いて、みんなの目  
が一樣に大きく開かれ、拍手がわき起こりました。ジュンペイくんは、枕元にランドセルと持つべき  
物をセットで置くことを続けたそうです。

個人の問題を学級みんなで解決し、支援する。これまで学級における話し合いというと、全体の問

題を扱うことが多かったと思います。しかし、一人の問題を全員で解決することは、個人にも全体にも大きなメリットがあります。議題を出した個人は、学級のみんなが自分のために話し合っている姿を見て支えられている実感を持ちます。また、支えている側から見ると、他者の問題を考えることで自分が誰かの役に立っていることを実感できます。これが、他者とつながっている感覚、共同体感覚です。

## ② 六年生の場合——授業中の態度

一学期の後半のことです。専科の先生の理科の時間に、「おしゃべりをする人がいる」という訴えがありました。訴えたのはユミカさん。彼女は勉強熱心ですが、「静かにしてよ」と注意をするようなタイプではありません。しかし、我慢ができずにクラス会議に訴えたのです。

話し合いが始まりました。こうした話し合いには、たいてい「注意する」という解決策が出ます。この日の結論は、「班長が注意する」でした。私は「きつとうまくいかないだろう」と思いました。私語を許している圧倒的多数がいるのに、誰かが注意すればいいという無責任な約束は、守られるわけがないと経験的に知っているからです。しかし、子どもが自分たちでなんとかすると意思表示した以上は、お手並み拝見です。

次の週の「解決策のふり返し」では、「うまくいかなかった」と報告がありました。今回の議題も先週に引き続いて同じことを話し合うことになりました。そして、今回の解決策は「班長だけでなく、周りの人みんなまで注意する」となりました。これも先週と同じです。やっぱりダメでした。

その次の週は、「おしゃべりする人が近くに座っているからしゃべる。だから、席替えをすればいい」となりました。私は、「自分たちの都合で席を替えるのだから、ちゃんと理科の先生に許可を取ってくださいね」と言いました。学級代表は、理科の先生に謝って許可をいただき、代表グループが理科専用の席をつくり、承認されました。

次の週、それでもやっぱりダメだったとわかりました。子どもはまずいと思ったのでしようか。いつもは進んで発言しない子どもも、手を挙げて発言していました。意見が多く出たために、結論が出ないままに、終了時刻を迎えようとしていました。慌てた司会は、「先生、どうしましょう。このままでは、結論は出ません」と助言を求めてきました。

私は、内心「どうしよう」と思いましたが、時間は守りたいと思ったので、「わかりました。みんなが納得すれば今日は結論を出さなくてもいいのではないのでしょうか……」と言いました。まだ、言いたいことがあったのですが、司会は「今日は、結論を出さないことにします！」と宣言して、解散してしまいました。みんなあつという間に教室からいなくなってしまうました。

私は、「次はどうしよう?」と思いましたが、見守るしかありませんでした。そして、ドラマは私のいない日に起こりました。その日のユミカさんの日記です。

「今日は、赤坂先生のいない日でした。朝からそわそわしていて、少し心配でした。(略)いつものように時間は過ぎ、五時間目の理科になりました。先生が実験をしてわかったことを聞きました。そしたら、なんとなく後ろから気配がして、後ろを見てたらズラーっとたくさんの手が挙がり

ました。I先生は興奮した感じで、「おおすごい三組、今日はさえているなあ。すごいわこれ、すごい」ほんとにびつくりして、私たちをほめてくれました。

この日を境に、この学級は、理科の時間に迷惑をかける集団からほめられる集団になりました。

また、クラス会議を継続していると、学級の「ターニングポイント」となる会議に出会います。この学級にとってこの理科の授業中の私語についての体験は、自分たちの生活に自ら責任を持つ学級になる一つの契機になったことは間違いありません。授業の態度の問題ですから、教師の問題だといえないこともありません。しかし、授業がうまく機能しなくて困るのは、子どもでもあるわけです。子どもの中から、自分たちの手で解決したいという声が上がったので、彼らに任せてみました。私に不安がなかったという嘘になります。しかし、彼らは私の信頼にみごとに応えてくれました。

子どもが失敗をすると、教師としては成功する方法を教えたくなくなります。なんとかしたいと思うのが人情、いや教師魂です。しかし、失敗する、次の方策を考える、そしてうまくいく。この試行錯誤のプロセスが成長には不可欠です。うまくいくと当然嬉しい。その快感が、行為の再現可能性を高めます。強化とはそうした営みです。なぜ、快感を感じるか。それは、前に失敗しているからです。失敗しているからこそ、成功の快感が大きくなるわけです。この場合、なにが強化されるのか。それは、問題解決の行動です。試行錯誤の末、問題を解決する。すると、また、問題を解決しようとする。

学級も小さな社会です。問題が起こることは避けられません。いくら予防をしても病気になるように、起こるときには起こるのが問題です。しかし、考えてみれば、病気はそれまでの生活の無理

や矛盾が症状となつて現れたもので、改善のまたとないチャンスです。問題が起これないようにならぬ先の杖をついてばかりいるのでは、子どもの学ぶ機会をみすみす奪っているようなものです。病気になるにつらい思いをするからこそ、ならないように生活しようとするわけです。

問題が起きない学級を目指すのではなく、問題を解決する学級、つまり、問題に強い学級をつくるのです。

「クラス会議」には、なにか典型があるわけではありません。私が示したものは一例です。大事なことは、学級に民主主義を確立することです。そのためには、民主的な手続きで「意思決定」するシステムが必要です。

「クラス会議」のような実践は、民主主義を掲げる日本において、学校で民主主義を体験する絶好の機会だと思います。

#### 参考

赤坂真二『荒れへの「予防」と「治療」——学級づくりの基礎・基本』日本標準、二〇〇六年

ジェーン・ネルセン／リン・ロット／H・ステファン・グレン『クラス会議で子どもが変わる——アドラー心理学でボジティブ学級づくり』会沢信彦訳、コスモス・ライブラリー、二〇〇〇年